
D.C.? 透明彗星

シオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C・？ 透明彗星

【Nコード】

N3678Y

【作者名】

シオン

【あらすじ】

深々と雪が降る冬の日。現れたのは桜の木の下で眠っていた記憶喪失の少年。無色透明なままでいた少年に色を与える周りの人々。まるで彗星のような早さで冬から春、そして……

とりあえず、若干？原作無視？最強設定なにそれ？ハーレム？知るかよwww

と、まあ、こんな感じの小説になる予定です

オリキャラ込みだから微オリジナルなのかな？

初投稿作品なので誤字脱字は日常茶飯事。よく分からない表現のオンパレードですが感想等お願いします

桜の木の下の始まり

深々と桜が舞っていた
驚くほどゆっくりと音もなく
見渡すかぎりには舞い散る桜の花びら

寂しくて

どうしようもなく

途方に暮れていたボクにさえ

見惚れてしまっくらいきれいな景色だった

だから

だからこれは夢なんだと思った

差し伸べられた手をぎゅっと掴む

温かな手

凍える世界で 雪のなかで

ぬくもりを確かめるようにぎゅっと

そんな 一瞬を告げる夢の始まり

深々と雪が降っていた。周りは暗くても彩りは鮮やか。季節はずれの桜が散る夜だった

桜の木の下には自らを抱くように眠る少年の姿があった

？」「……………こじって……………」

目を覚ますと覚えのない場所にいた。懐かしい感じもしない。けど、それよりも

? 「僕って……誰？」

僕には自らの名前を含め全く記憶がなかった

? 「……寒い……」

寒い冬の真夜中。見知らぬ土地に1人。記憶が無いこともあり得体の知れない恐怖が沸き上がってくる

? 「……あつ……桜の花びら、綺麗だな……」

何をすればいいのかわからない。どこに行けばいいのかもわからない。そんな恐怖を感じている中、なぜか舞い散る桜を見たらそんな言葉が冷静に出きた

女の子「この島で見ない子だけど、どうかしたのかな？」

? 「えっ……」

ボーツと桜を見ていたときにいきなり後ろから話し掛けられ、少しビクツとしてしまう。振り向いた先にいたのは、かなり小柄な金髪のツインテールが似合う女の子がいた

女の子「こんな時期にこんなところにいると風邪引いちゃうよ?」

? 「……ッ!」

女の子は笑顔で手を差し伸べてくれた。けれど今の状態のせいで反射的に身を退いてしまう

女の子「大丈夫。ボクは何もしないよ。ただ君の助けになってあげたいだけ」

初対面なのに優しくしてくれる。僕は最初は少し躊躇ったけれど、その女の子の温もりにすぎるように相手の手をとった

女の子「君、名前は？」

女の子は当たり前前のことを聞いたのだろうけれど今の僕には答えられない質問だった

？「……………記憶が……………ないんです……………」

女の子「えっ……」

少し俯き気味に話したのもあるのだろう、女の子は一瞬驚いた表情になったあと、気まずそうに黙ってしまった

？「き、気にしないで……………大丈夫だから……………」

どこも大丈夫な部分なんてないけれど心配させたくなくて、不安の色混じりの笑顔で強がってしまった

女の子「ボクを心配してくれてありがとう。でも君の方が今は大丈夫じゃないよね？」

?「……………」

女の子「もし君が良かったらだけど、ボクの家に来ない？」

?「で、でも……………」

その提案は嬉しかったけれど初めての場所、初めての相手と色々な気持ちで躊躇わせる

女の子「住むかどうかは後にしてもいいから場所だけは移そうよ？
流石にここは寒いからね」

?「わ、わかりました……………」

言われて思い出したが外はかなり寒く、身体は冷えきっていた。今は考えないで暖を取ることを優先する

さ「ボクの名前は芳乃さくら。君の名前は？」

?「え、えつと……………」

さ「あつ、ごめんね。記憶がなかったんだよね…。でも名前がないと色々不便だし……………」

さくらが考えている横で僕はじっと桜を見ていた。何か思い出せそうなのがする

?「……………ゆ……………ゆ……………ゆ……………き……………」

ただ頭の中から出てきた言葉を並べていく。ゆうぎ、それが自分の

名前なのだろうか

さ「ゆうき、それが君の名前？」

ゆ「わ、分からないけど多分……」

他にも思い出そうとしたが、名前以外は思い出せなかった

さ「記憶が戻る第一歩だね」

さくらは自分のことのように喜んでいる。そんな姿を見るとつい笑ってしまった

さ「あつ、ボクのこと笑った！」

ゆ「す、すみません……。でも嬉しいような可笑しいような感じでつい……」

必死で笑いを堪えながら、そう言う。堪えられていないけれど

さ「けど、ゆうき君、初めて笑ったね」

ゆ「えっ……」

さっきまでの怯えや恐怖はまったく無くなっていて、今では逆に話していると安心感を感じれる

さ「うーん、やっぱりゆうきって下の名前だけじゃ不便だね……」

ゆ「て、適当に考えてもらえれば……」

さ「よし、じゃあ芳乃ゆつき君にしよう！」

ゆ「……………えっ？芳乃って……………」

相手の名前を入れられたのでポカーンとしてしまう。嬉しいような申し訳ないような、そんな曖昧な感じになる

さ「君さえ良ければボクのところに住んでもいいよ。キミが良かったらけどね」

ゆ「そ、それは嬉しいですけど……………勝手に決めて大丈夫なんですか？」

さ「それってどういうことかな？」

わからないようでさくらは首を傾げている

ゆ「家の人に話してからの方がいいんじゃないですか？」

そういつた瞬間何とも言い難い沈黙が流れた。僕、何か間違ったこと言っただかな？

さ「……………ゆつき君、何か勘違いしてない？ボク、これでも大人だよ？」

ゆ「…………………………」

僕の中では衝撃的な発言をされた。頭の中でそのことに整理が追い付かずしばしの沈黙

ゆ「……ほ…ホント……ですか…」

多分、僕は面白いくらい驚いた顔をしているに違いない。でもそれ位驚きを隠せなかった

さ「むう…それは流石に失礼だよー」

ゆ「す、すみません！？あの…えっと………」

驚きがまだ納まらずどうすればいいかあたふたとしてしまう。謝る他になにをすればいいかなど分からずとりあえず、あたふた

さ「あはは、冗談だよ。こんな見た目だからよく間違えられるんだよ。だから気にしたらダメだよ？」

さくらさんが微笑みながらそういう

ゆ「は、はい………」

さ「じゃあ、風邪引く前に行こっか」

そういつて手を引かれる。正直に言つと恥ずかしい。自分の年はわからないけれど確実にさくらさんよりは大きい。年上が見た目年下の子に手を握って歩いているのは恥ずかしい。けれど…

ゆ「手、暖かいですね…」

さ「そうかな？ゆつき君の手が冷たいだけだよ。きつと」

そういわれて初めて自分がずっと桜の木の下にいたことを、思い出
し恥ずかしそうに笑った。けれど、誰かに手を握ってもらえること
が今の僕にとって、とても暖かった

桜の木の下の始まり（後書き）

シオン「ふう……やっと第一回を更新完了？」

ゆうき「お疲れさまです。なんか今回、僕ってさくらさんを年下と
思ってたときも敬語でしたね……ジー」

シオン「初心者故の間違いだ！と、こついつてれば許されるだろ
う」

ゆうき「先が思いやられる……」

と、まあ、後書きは毎回こんな感じの反省会になりますw
長い間、更新し続けれると思う今日この頃です

居候（前書き）

最近よく執筆がはかどるなあ、と考えたら、はかどる期間が

テスト期間中

ということが判明w

受験二ヶ月前だけど気にしたら負けですよねwww

居候

あれから僕はさくらさんに家まで手を引かれていった。その間に色々な話を聞いた。隣の朝倉という家の姉妹がよく遊びに来ること。

見た目では、僕と同じぐらいの歳の男の子が居候していることなど

さ「とうちゃくく、ここがボクの家で、これから君の家になるところだよ」

ゆ「お…大きい……………」

話では聞いていたのだけれど、ここまで大きい純和風だとは予想外だった。普通の家は記憶がないから分からないのだけれど

さ「ただいま」

ゆ「お、お邪魔しま…」違つよ「…えっ……………」

突然さくらさんに言葉を遮られる

さ「ただいま…でしょ？」

ゆ「た…ただいま……………」

初めての言葉に少し緊張しながらも言った後には笑みがこぼれた

さ「義之君、いい知らせがあるよ〜」

そのまま居間に向かうがさくらさんは先に「トコトコ」と走って行って

しまつ。入りづらいので、さくらさんが戻ってくるまで今の前で待機することだ

義「お帰り、さくらさん。いい知らせって何ですか？」

さ「あのね、新しい子がこの家に住むことになったんだよ」

義「ええっ！？本当なんですか!？」

さくらさんは義之と呼んだ男の子の反応に笑っている。正直、僕も笑いそうだ

さ「ゆうき君、入ってきていいよ」

さくらさんに招き入れられて居間に入る。入るとさくらさんよりは遥かに背が高く、僕よりも少し背が高い男がいた

ゆ「こ…こんにちは……」

男と話すのは初めてなのでがちがちに緊張している

義「この子ですか？」

さ「うん、そうだよ。名前は芳乃ゆうき君。この家に居候してもらおうと思ってるんだ」

義「……………ええ!？」

その後、さくらさんの予想通り混乱気味になった義之。すぐにさくらさんの的確なフォローのお陰で落ち着いた

義「お前、色々大変みたいだな。さくらさんに聞いてるかもしれないけど、俺は桜内義之。義之でいいよ」

ゆ「よろしく………よ、義之……」

初めての同年代の相手にタメ口で話したためかなりぎこちなくなっ
てしまっている

義「記憶喪失なら色々と大変だから、何かあったらいつでも俺を
頼ってくれればいいよ」

さ「そうそう、ボクがいない間は義之君に手助けしてもらってね」

ゆ「はい。これからよろしくお願いします、さくらさん、義之」

お辞儀をしながらそういうと2人は温かく迎え入れてくれた。記憶
のない僕の新しい家族。いきなりそう考えるのは凶々しいかもしれ
ない。けど、考えると笑顔になってしまう。つられたように二人も
笑っていた

さ「さてと、ゆうき君の紹介も終わったことだしご飯にしようよ。

もうお腹ぺこぺこだよ」

さくらさんは、自分で用意する気はないようで、すぐにコタツに入
っていた

義「もうじき、音姉と由夢が来るんでそれまで我慢してくださいよ」

さ「ええ……」

よっぽどお腹が空いているのだろう。まるで屍のようにこたつに突っ伏している

??・? 「お邪魔します」 「お邪魔します」

さくらさんが突っ伏してから約数分後、義之が言う音姉さんと由夢さんが来たようだった

さ「音姉ちゃん、由夢ちゃん！早く座って座って!!」

?? 「ど、どうしたんですか!？」

入ってきた音姉さんが由夢さんは、さくらさんの鬼気迫る表情になり驚いている

義「さくらさん、さっき腹ペコで帰ってきて早く飯食いたいんだつてさ」

? 「そんなことより、兄さん。この人は誰なんですか？」

さくらさんは食べる気満々なようのだが、予想通りというか当然だけど、2人とも僕のこと気がなるようだ。珍しいという意味で

ゆ「僕は、芳乃ゆつきです。今日からこの家に住むことになりました。よろしくお願いします、由夢さん……で、あつてますか？」

どちらが由夢さんか音姉さんかは分からないけれど、完全に勘で聞いてみた

由「は、はい…。私は朝倉由夢です。よろしく願いします……」
一応合っていたみたいだった。けれどやはり芳乃という名前に違和感を覚えているようだ

ゆ「詳しいことはあとで話すので、今はご飯にしませんか？さくらさん、凄いことになっているので……」

横目でちらりと見るとあまりの空腹にだろう。今にも夕食に飛びつくようにしている気がする

由「そ、そうですね。それと私の事は由夢でいいです。流石に、年上の人にさん付けされるのは慣れないので……」

由「うん、わかった。なら僕の事は由夢ちゃんの呼びやすい呼び方で呼んでくれれば」

由「ちゃん付けですか!？」

あからさまに驚かれた

ゆ「あれ、ダメだった？」

由「だ、ダメじゃないですけど……」

すると、なぜか顔を赤くしてそっぽを向くと、皆と同じようにコタツに入った。何か間違えたのかな？そう思いつつ僕もコタツに入っ
て記憶で初めての夕食を食べはじめた

音「自己紹介が遅れましたね。私は由夢ちゃんのお姉ちゃん、朝

倉音姫って言います。よろしくね、ゆうき君」

ゆ「は、はい…、よろしくお願いします、音姫さん」

由夢ちゃんは少しキツイイメージがあるけれど、音姫さんは対象的でとても落ちついた優しいイメージがある。食べ始めて、さくらさんが落ち着いた頃合いを見て由夢ちゃんが切り出した

由「ゆうきさん、そろそろ話してくれませんか？なんで芳乃って名前でここに住むことになったのかを…」

ゆ「うん、信じてもらえるか微妙だけど……」

本日三度目の自分のことについて話し始める。流石に三度目になると話すのには慣れてきたので要点だけを伝える

由「記憶喪失…ですか……」

音「けど、それなら納得ですね。ゆうき君が、さくらさんの家に住むことになったのもなんとなく頷けるます」

由夢ちゃんは微妙だけれど音姫さんは理解してくれたみたいだ

ゆ「ホントにさくらさんには感謝です」

笑いながら改めてさくらさんにお礼をいうと、照れたように笑う。やっぱり小学生ぐらいにしか見えない

義「そういえばさ、ゆうきは学校どうするんだ？」

ゆ「うーん……………流石に今からだと中途半端な時期になっちゃうから、来年くらいから行くのかな」

記憶のない僕からすれば学校は楽しみの場所だけれど、こんな時期にしかもいきなりの編入試験も無理だと思えた

さ「あつ、そのことならボクが編入試験、受けれるようにしてあげるよ」

ゆ「……………えっ?」

なにを言われたのか理解するまでに5秒ほど要した

さ「だから、ボクが学園長をしている風見学園に入れるようにしてあげるよ、って」

さらにフリーズの時間がのびる。かなり頭の中は混乱していた

ゆ「……………えええ!!」

頭の中で整理を終えると、意外すぎたので自分でも驚くぐらいの大声で驚いてしまった

ゆ「が、学園長って……………」

義「ゆうき、残念ながらホントのことだ」

由「私達も入った当時は驚きました」

音「だから今の反応はゆうき君だけが変なわけじゃないの」

自分だけでなく他のみんなも同じだったと知ると、そこそこには落ち着いた。横では

さ「みんな、ボクを子供扱いしてたんだ……………」

由「さ、最初だけですよ？」

と、かなり落ち込んでいるさくらさんと、慌てて励ます由夢がいる

ゆ「でも、僕なんかいきなり大丈夫なんですか？」

流石に学園長だからと言っても無茶なのかもしれないと思っていた

さ「それは大丈夫だよ……………。明日の朝に受けてもらえば、明後日からは登校してもらえるよ……………」

まだ立ち直れてないさくらさんから説明が入る。ホントに大丈夫なのだろうか…………。と、そんなことを考えて、すぐ

ゆ「あ……………」

なぜだか分からないがいきなりものすごい睡魔に襲われる

さ「ゆうき君、大丈夫？」

ゆ「なん……………ねむ……………」

あまりの眠さにそのままさくらさんに倒れこむように寝てしまっ

さ「あわわっ？た、助けて??？」

と、最後にそんな可愛らしい悲鳴が聞こえた後、意識を手放した

居候（後書き）

ゆうき「ZZZ……」

シオン「ああ……見事な爆睡態勢で……」

由夢「いきなり眠るなんておかしいですよね!？」

シオン「大丈夫大丈夫。疲れ果てて寝ただけだからWWW伏線でもなんでもないのさ（キリッ）」

一同「……はぁ……」

この辺りまではぬくぬくと保存メールに暖めていた物なので次回からはたぶん不定期になりますw

第三章「学園ちよ…………orz」（前書き）

よっしやあああ!!

なんか久しぶりのモンハン2ndGでまさかの3死なのに火竜の紅玉二個ゲット？

運が向かってきてるのか!?

と、あまりのテンションに馬鹿になってます（笑）

そこ、古いとかいうな）　□　；　（

第三章「学園ちよ……orz」

夢を見ていた。少年や少女が桜の木の前で願い事を言っている。みんな、それぞれに叶えたいことがあったり助けたい人がいたりした。そんな、みんなを見続ける夢

「……………き……さい…」

そんな中、微かに違う声があった。小さく聞き覚えのある気がする声

「お……………ださい……………」

小さすぎてよく聞こえないよ。もう少し大きい声で……

「起きてください……！」

その声があまりに大きかったので、いきなり意識を覚醒させられる

ゆ「ッ!?!……………つて、由夢……ちゃん……………?」

目を覚ますと目の前に由夢ちゃんがいることに寝呆け眼では少し疑ってしまった

由「そうですね。他の人に見えますか?」

ゆ「ごめん……………。わざわざ起こしてくれたの?」

少し不機嫌そうになった相手にすぐに謝る

由「お姉ちゃんが兄さんとゆうきさんの朝食作りに来たついでにです……」

こつちを向かないで言ってるから、もしかしてさっそく嫌われたかな？と思ってしまう

由「すぐにできるみたいなので、早く降りてきてくださいよ」

そう言い残すと由夢ちゃんは、さっさと降りて行ってしまった。由夢ちゃんが降りていった後に気付いた

ゆ「……着替えは？」

自分が着ているパジャマ以外、着替える服が見当たらない。考えても無いものはないので、仕方なくパジャマのまま一階へ降りることに

ゆ「お、おはようございます……」

なんとなく緊張しながら障子を開けるとさくらさんを始め義之、音姫さん、由夢は、もう朝食を食べ始めていた

さ「ゆうき君、遅いよ。みんな食べてるから、早く食べなきゃなくなっちゃうよ?。」

昨日通り元気なさくらさん

義「さくらさん、俺たちも流石にそこまでは食べないですよ?。」

賑やかな食卓だった。僕には懐かしくもなく、ただ新鮮な気がした。そう思うと微笑を浮かべながらこたつに入る

ゆ「いただきます」

朝食はご飯に味噌汁、鮭の塩焼き、卵焼きにサラダといたって普通だった

音「私が作ったんですけど、どうかな？」

少しおそるおそるといった感じで感想を聞いてくる音姫さん

ゆ「普通に美味しいですよ。この鮭、塩気がちょうどいいです。卵焼きも味付けも好みですし」

音「ならよかった……。もし、お口にあわなくてびっくり返されたらどうしようかと……」

ゆ「……僕って、音姫さんにどう認識されてるんですか……」

音「あれ？違うんですか？」

ゆ「当たり前です……」

僕からはため息が、周りからは笑いが上がった。と、突然由夢の携帯のアラームがなる

由「お、お姉ちゃん、兄さん、時間だよ？」

義「ん、もうそんな時間か。さくらさん、ゆづきは任せていいんですよね？」

さ「もちろんだよ、だから、みんなは遅れないようにね」

さくらさんがそういうと皆慌ただしく出ていった。今更になって思ったけど、僕はこんなのにんびりしていてもいいのだろうか？

さ「じゃあ、ゆうき君。そろそろ行くっか」

食器を片付け一段落してから、さくらさんが切り出した

ゆ「き、着替えってどうすれば……」

さ「それもそうだね……。今は義之くんのを着てて」

そういつて二階が上がっていく。程なくして服を持って下りてきた

さ「じゃあ、これに着替えてきてね。ボクは今のうちに洗い物しておくから」

言われた通り着替えにさっきの部屋に戻る。いつのまに用意していたんだろっか。いつの間にかベッドの上には服が一式置かれていた

ゆ（かなりぶかぶかだし、勝手に着ても大丈夫なのかな……）

そんな今更なことを考えつつ着替えを済ました

ゆ「編入試験って、勉強してない僕でも大丈夫なんですか？」

着替えが終わって今に戻るとずっと考えていたことを尋ねる

さ「大丈夫大丈夫。そこはボクの力も使ってね」

ゆ「そ、そうですか……………」

そんな勝手に職権乱用しても大丈夫なの？と内心思ってしまう

さ「それじゃあ、今度こそ行こっか」

そんな心配を抱えながら、戸締まりを済ましさくらさんと家を出た。外はやっぱり寒いのに桜が舞っている

ゆ「風見学園って、ここから近いんですか？」

さ「この道をまっすぐ行くとすぐに見えるよ。迷子にならないでね？」

ゆ「当たり前ですよ。さくらさんも横にいるわけですし」

さ「あつ、ならやらないといけないお仕事あるから、ボクは先に学園に行ってるからね」

と、突然そう言うのと茫然としている間に、タタタツッと行ってしま
う、さくらさん

ゆ「……………えっ？」

思考が一瞬追いつかなくて道のと真ん中で立ち尽くしてしまっ

ゆ「さ、さくらさん、まさか放って……………」

なんか微妙な絶望感が僕を襲った。なんで知らない街でいきなり地

図もなしにほっぴり出されるとは……

ゆ「はあ……。何ていえばいいんだろ……」

立ち尽くしていても仕方ないので、さくらさんの言うとおりの道を真つすぐに行く。桜が辺り一帯を覆う綺麗な公園道を歩いた。半分は楽しみながらもう半分は分からない違和感を感じながら

程なくして風見学園に着いた。のだけれど、どこへいけばいいのか全然わからない。家も広かったけれど学校もかなりの広さがあったゆ「場所も分からないし、私服だから物凄い目立ってるし……」

仕方なく学園内に入ったわけだが、体育の授業中の生徒や教室の窓から物凄い視線を感じる

ゆ「仕方ないから帰るか……」

このままいても恥ずかしいだけなので帰ろうと校門にむけ歩こうとしたら

音「ゆうきくん!」

聞き覚えのある声が後ろか聞こえてきた。朝に聞いてきたので聞き覚えがあるのは当たり前なのだけれど

ゆ「音姫さん、ちょうどよかった」

たまたま音姫さんと会うことができてかなりホッとする

音「どうしたの？さくらさんと一緒じゃなかったの？」

ゆ「そ、それが……」

音姫さんは授業の途中に抜け出してきたようなので手短かに説明する

音「さくらさんらしいですね？仕方ないです、代わりに私が今から学園長室まで案内しますね」

ゆ「そ、そんな？？さすがに悪いですよ……」

流石に授業途中で抜け出すだけでも申し訳ないのに、案内なんてとんでもなかった

音「大丈夫ですよ。先生にはもう言っておりますから」

微笑みながらそういって手を引かれ歩きだす

ゆ「お、音姫さん!？」

不覚にも突然のことでドキリとしてしまう

音「さあさあ、早くしないと私の授業が終わっちゃうよ」

ゆ「そ、それなんかおかしい気が……?」

ため息を吐きながらも仕方なく、そのまま付いていくことに。周りからの視線で殺されそうな気もするが、出来る限り無視しておいた方が身の為だと、そんな気がした学園長室

音「さくらさん、音姫です。失礼します」

音姫さんは、慣れたように学園長室のドアをノックしてから中には
いっていった

さ「あれね、音姫ちゃん？どうかしたの？」

音「さくらさんにお届けものですよ」

さ「お届けもの？」

可愛らしく首を傾げている様子を見ると僕の話は、完全に忘れて
いるようだ

ゆ「お、お届けもので〜す……」

ドアの横に隠れていたので顔を出すと

さ「ああ、ゆうき君のこと完全に忘れていたよ!!」

ゆ「ですよね……」

普通に言った。素直なのはいいことなのになぜムカツとするのだろう

音「それでは、私は授業があるので失礼しますね」

僕とさくらさんの会話を笑ってみていた音姫さんがそう切り出した

ゆ「音姫さん、ありがとうございます」

出ていく前に最後にそういうと笑ってこちらに手を振って行ってしまった

さ「ホントに「ごめんね!」!」

目の前で手を合わせて必死に謝るさくらさん

ゆ「いや、気にしないで下さい……。あの時、さくらさんに付いていかなかった僕のせいでもあるんですから……」

あまりに必死に謝られたので、こちらがかなり申し訳なくなってしまう

ゆ「そ、そんなことより、この後の編入試験はどうなったんですか？」

一旦、話を止めて今の緊張していることを聞いてみる。この人のことだ。忘れてたりしそうだ

さ「編入試験用のテストを今、作ってたんだよ」

ゆ「……………い、今作ってたんですか？」

学園長とわかった時もだけれどホントにこの人には驚かされるみたいだ。今のはさすがに驚き通り返して呆れたけれど

さ「それじゃあ、早速始めるよ」

ゆ「ま、まだ色々と準備が……」

いきなりの開始準備に少しの猶予を願うが

さ「はじめ〜」

ゆ「話を聞いてくださいよ……」

願いも虚しく始められてしまう。何も準備できないまま試験を受けることに……

ゆ「……………さくらさん……」

試験が開始してから10分ほどして気付いたことがあった

さ「どうしたのかな？」

いつも通り元気なさくらさん。行動以外は

ゆ「なんで、じつとこっちを見てるんですか？」

が、試験開始から今まで目の前、和風の学園長室にあるこたつの、僕の向かい側に座ってこっちをじつと見ていた

さ「えへへ、別に理由なんて無いよ〜」

ゆ「気になって仕方ないんですけど……？」

ため息混じりで呟く。集中力が切れて仕方がない

さ「えっ！？ゆうき君ってボクのことか……………」

ゆ「……………えっ?」

いきなり、さくらさんが顔を真っ赤にして顔を隠しはじめる

さ「気になるだなんて。さ、さすがに、そんなにストレートに言われるとボクだって恥ずかしいよ／＼」

ゆ「えっと……………。普通に気が散るってことなんですけど…………?」

さ「……………わ、分かってるよ??当たり前だよ」

ゆ「な、ならいいんですが…………」

内心絶対に嘘だとは分かっていたが試験中ということもあり追求はせず試験に集中する

ゆ「やっと終わった…………」

あれから約四時間。休憩をまったく挟まずに続けてテストを受けていたので、今は空腹と疲労感からグッタリしている

さ「お疲れさま 今日の結果は明日の朝に教えるね」

ゆ「分かりました……………。さくらさん、お昼どうすればいいですか…………」

結果がどうこうよりもまずお腹を満たしたかった

さ「お腹が空いたなら学食に行くといいよ。ちょっと待っててね」
そう言い残すと学園長室から出ていってしまう。何をやる気なんだろうか

桜内義之君。今すぐ学園長室に来てね

さくらさんの声が聞こえてきた。廊下に設置されてるのである。スピーカーから。さくらさんは仕事が忙しいから僕の案内役を義之に任せようという感じだろうか

さ「ゆうき君、ボクはお仕事片付けないといけないから義之君に案内してもらってね」

予想どおりのようだ。一度息を吐いてから

ゆ「分かりました。でも、私服で大丈夫ですか？」

さ「大丈夫大丈夫。なにかあったら義之君がフォローしてくれるから」

大丈夫じゃなかった。それって義之が苦労するんじゃない……と内心考えつつも頷いておく

さ「それじゃあ、義之君が来たら食べてきてね」

そう言い残してまたどこかへ行ってしまふ。ホントに子供みたいな人だが言ったら怒られそうなので何も言わないでおこう

ゆ「にしても、お腹すいた……。義之来る前に学食探しに行くのもいいか……」

義「結城まで、俺に迷惑かけて楽しいのか……」

本気で探しに行こうとした途端、後ろから義之があらわれた

ゆ「そ、そんなわけないよ……」

いきなり後ろに現れた義之に笑ってごまかす。誤魔かせたかは別として

義「まあ、馬鹿言っていないでさっさと行くぞ。早くしないと席埋まっちゃうからな」

ゆ「わ、わかったけど、ホントに迷惑じゃないよね？」

片付けてから慌てて付いていく。その途中つい、心配になり聞いてしまう

義「まだ馬鹿言ってるのか？家族なんだから迷惑なわけないだろ」

ゆ「そ、そう……」

迷惑じゃないことより家族という言葉がなぜか無償に嬉しかった

義「それじゃあ、ちゃんと後ろついてこいよ。学園内で朝みたいに迷子になったら色々と洒落にならないからな」

ゆ「朝ので十分理解したから大丈夫？」

僕の懲りたようすが面白かったのか、少し笑われてから学食へ向かう。少しは抗議もしたところだけれど不本意だが、また迷子になると大変なので大人しく付いていくことになった

第三章「学園ちよ…………orz」（後書き）

ゆうき「毎回疲れる…………」

シオン「まあ、仕方ないさ。そんなキャラが1人ぐらいいいなとな」

ゆうき「一応、僕主人公だよね!？」

シオン「……………ウン、ソウダナ」

ゆうき「今の間と変な片言なにさ!？」

シオン「まあまあ、お時間も迫ってきたことですし次回でまたお会いしましょう。チャオ〜」

ゆうき「テンションバグってきたね……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3678y/>

D.C.? 透明彗星

2011年11月10日09時39分発行